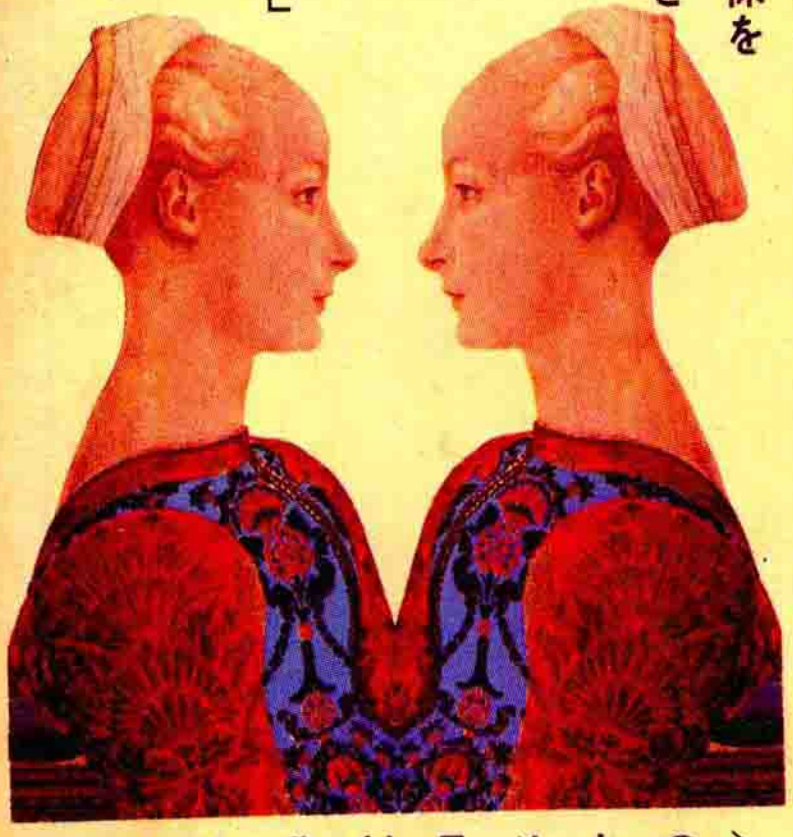
539
講談社現代新書

人間関係の心理学

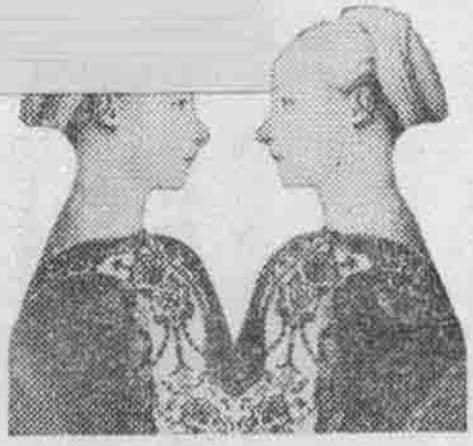
早坂泰次郎

他人とまともに視線を合わさない人がいる。日本人には、対人恐怖症さえ少なくない。人びとが真の人間関係を見失ったのは、これと無関係だろうか。著者は、たんに和気あいあいの「よい人間関係」ではなく、「ほんとうの人間関係」を模索してきた。↘



↘まなざしを、ただ相手に向けるのではない。瞳は〝人見〟であり、たがいに瞳にとどかせるのだ。その重さを説き人が真の人間関係を見出してゆく過程を描き出す。対人関係トレーニングでの、著者の豊富な体験をもとに、人間一般より、かけがえのない一人一人の人間のあり方を説く本書は、さまよえる現代人のための人生読本である。

間関係の心理学



早坂泰次郎

講談社現代新書

人間関係の心理学
昭和五四年四月二〇日第一刷発行　昭和五六年四月一〇日第九刷発行
定価——三九〇円
著者——早坂泰次郎
© Taijiro Hayasaka 1979 Printed in Japan
発行者——野間惟道　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二　電話〇三—九四五—一一一一　振替東京八—三九三〇
装幀者——杉浦康平＋海保透
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
0211-455390-2253(0)
落丁本・乱丁本はおとりかえします（学1）
需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はじめに……3

第一章　人間関係をどう考えるか……9

1—世界のなかの日本人　10

2—日本人論への疑問　22

3—Tグループの体験を通して　30

第二章　性格は変化するか……39

1—パーソナリティの変化の意味　40

2—パーソナリティのとらえかた　48
3—「発達」をどう理解するか　55
4—人間をよりよく知るために　63

第三章　「感じる」ことの意味——共体験としての時間……73

1—「ほんとうのグループ」の意味　74
2—体験時間とはなにか　85
3—時間と空間　97
4—時間体験の様相　106
5—グループ体験とはなにか　115
6—自己と他者　123

第四章　「自己」をどうとらえるか……139

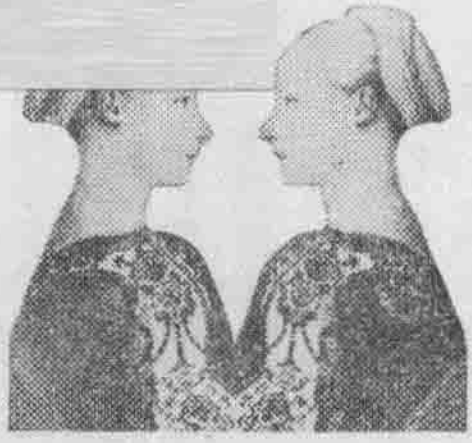
1—孤独とさびしさ——自己と状況　140

2—自己・他者・世間 149
3—核家族をどう考えるか 156
4—親子関係の心理学 164

第五章 「ほんとうの人間関係」を考える……177

1—「よい人間関係」「ほんとうの人間関係」 178
2—日本人にとって「つながり」とはなにか 188
3—その人らしさを求めて 198

間関係の心理学



早坂泰次郎

講談社現代新書

はじめに

わたしは幼稚園から大学時代までを植民地で過ごした。わたしはふるさとを持たない。終戦後に経験した「引き揚げ」は、わたしには大きなカルチュラル・ショック（異文化に接した衝撃）であった。それがなければ、人間関係というあたりまえの問題に関心をもつこともなかったろうし、のちに紹介する対人関係トレーニングを終生の仕事にすることもなかっただろう。その意味では、そのカルチュラル・ショックは、今なおわたしのなかに生きているといえよう。

ところが、この人間関係という、あまりにも日常的な、しかし永遠に新しい難問に対して、心理学者たちの学問的とり組みは、これまであまり真剣ではなかったように思える。フロイトが精神分析学の理論をはじめて学会で展開したとき、当時のドイツの精神医学界の大御所は、「これは学問ではない！」と激怒したという。人間関係の具体的な問題に対する心理学者たちのとり組みにも、いくらか似たところがあるようだ。

たしかに、心理学の教科書のなかには、「人間関係」について一章をさいたものがないわけではない。社会心理学の教科書ならなおさらのことだ。人間関係、あるいは対人関係という主題についての学術的著書さえ何冊か刊行されている。しかしそこで説かれる人間関係は心理学の一つの分野あるいは領域として――すなわち、知覚や学習やパーソナリティなどとは別の

ことがらとして――、他の分野とはちがった概念、ちがった方法による成果の解説であるのがふつうだ。しかもそこで紹介される学説やデータはほとんど、欧米の学者たちのものである。

心理学者だってなま身の人間だから、日常の人間関係のなかで、笑ったり怒ったり悩んだりしているはずなのだ。しかしそうした日常のことがらとしての、いいかえれば知覚や学習やパーソナリティなどの問題を登場させる、舞台そのものとしての人間関係というナマぐさい主題は、民俗学、文化人類学、日本文化論、精神医学などにまかされ、アカデミックな心理学の研究のなかではむしろタブー視されてきた観がある。それが扱われる唯一の分野は臨床心理学だが、ここでも理論は欧米からの輸入ものがほとんどすべてだという事情はかわらない。

ひとつには、とくに日本での戦後の心理学研究の方法が、自然科学一辺倒になってしまったことにもよるが、もうひとつは、そうしたナマぐさい問題に触れようとすれば、大なり小なり、自分自身のホンネを公開しないわけにはいかなくなることにあるのではないかと思う。しかし何事だって、人間ほんとうに真剣にとり組めば、ホンネがにじみ出てくるものだ。

人びとが「人間関係」のことで泣いたり悩んだりしているのは、ホンネであってタテマエではない。心理学者がその人間関係の問題に、ホンネをまったく出さずにタテマエとしてだけの知識や学説しか提供しないとしたら、そうした学問や教説が空々しくひびくのは当然であろう。わたしはわたしなりのホンネでとりくんでみようと思った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この本は前著『人間関係のトレーニング』（講談社ヒューマン・ブックス）の姉妹編であるともいえる。前著は、わたしがここ十年ほど、もっぱら実践的にとりくんできた主題についての体験的記述であった。グループによるトレーニングの場を通して、わたしはさまざまな人と出会い、彼らのさまざまな「気づき」、さまざまな変容の瞬間やプロセスを目撃してきた。それを通してわたし自身が多くの「気づき」、さまざまな変容を自ら体験してきたことはもちろんである。この本の目的のひとつは、そうした目撃や体験を、少しでも理論的に明らかにすることであった。けれども、心理学者としてそのことにとり組むかぎり、心理学の歩みそのものを見直す、いわば学問的吟味と切り離すわけにはいかなくなる。そのためにこの本のなかには「新書」の性格からいくぶんはみ出した印象を与える部分があるかも知れない。お許し願いたい。

ところでアメリカで日本文学を講じている板坂元氏は、人間関係について「黒白をつけない」のが日本人の伝統だという（『日本語の表情』講談社現代新書）。その意味では、人間関係を理論的に解明するなどということは、野暮の極であるにちがいない。しかしいわば日本人であって日本人でない一人の人間の手になるこの本が、もしひとつの問題提起になれば嬉しいと思っている。

編集部の渋谷裕久氏、水口博也氏にはたいへん手数をわずらわせた。謝意を表したい。

一九七九年三月上旬

早坂泰次郎

目次

はじめに……3

第一章　人間関係をどう考えるか……9

1—世界のなかの日本人　10

2—日本人論への疑問　22

3—Tグループの体験を通して　30

第二章　性格は変化するか……39

1—パーソナリティの変化の意味　40

2—パーソナリティのとらえかた　48
3—「発達」をどう理解するか　55
4—人間をよりよく知るために　63

第三章　「感じる」ことの意味——共体験としての時間……73

1—「ほんとうのグループ」の意味　74
2—体験時間とはなにか　85
3—時間と空間　97
4—時間体験の様相　106
5—グループ体験とはなにか　115
6—自己と他者　123

第四章　「自己」をどうとらえるか……139

1—孤独とさびしさ——自己と状況　140

2—自己・他者・世間 149
3—核家族をどう考えるか 156
4—親子関係の心理学 164

第五章 「ほんとうの人間関係」を考える……177

1—「よい人間関係」「ほんとうの人間関係」 178
2—日本人にとって「つながり」とはなにか 188
3—その人らしさを求めて 198

第一章　人間関係をどう考えるか

ミケランジェロ〈話しをする三人の兵士たち〉

1——世界のなかの日本人

あるトラブル

わたしのような戦中派の人間は、もはや三十年近く前であっても、戦後のことを「昔」といってしまうには抵抗があるのだが、その「昔」に読んだアメリカの社会心理学書に書いてあった話からはじめよう。いまでは書名も著者も記憶になく、メモもないのが残念だ。

終戦後間もなく、世界各地に駐留していたアメリカ軍のうちでも、ロンドン駐留の兵士たちが、イギリス市民とのあいだで、他の国では見られないようなこみいったトラブルをおこしてしまう、といった事件が引き続き起こった。心配したアメリカ政府が、有名な文化人類学者のマーガレット・ミード（Mead, M.）に依頼して原因の調査にあたってもらったところ、その調査報告書の一節につぎのような指摘があったという。「こうしたトラブル発生の原因の一つは、イギリスでは英語が通じることにある」というのだ。

この話は、「ことばとは何か」を考えてみるのに恰好な事例といえようが、それは同時に、われわれが「人間関係」に関して知らず知らずのうちになじんでしまっている誤解の一つをもあ

ばいてくれる。

ミードが言おうとしたのはたぶんつぎのようなことだったろう。いまはメモにも残っていないその書物にも、詳細な記述はいっさいなかったような気がする(御存じの方があったら御教示頂きたい)。

一口に「英語」というが、英語と米語とは微妙なちがいがある。英和辞書をひいているときどき「英国では……」「米国では……」と語意が記し分けられているのに気がつく。こうした微妙なちがいは、それらのことばを常用しているイギリス人とアメリカ人のあいだにも、微妙なかげをつくり出しているようだ。

戦前に、中学ではじめて英語を学んだわれわれの世代では、英語は文字どおり英語であって、米語ではなかった。一九六七年にはじめてロンドンを訪れたときには、そこで会った何人かのイギリスの学者たちから「お前は British を話す。American でないのがいい」といわれたし、その後引き続き旅したアメリカでは、イギリス英語を話すボストンなど、東北部の人びとのことを「奴らは気取ってる」といったアメリカのインテリに何人も出会った。テープによる外国語の自己学習で有名なリンガフォンでも、「英語」と「米語」が別になっているのを、ある機会に発見した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com